

歴史の交差点

神田外語大学客員教授 山内昌之



「斗酒とちゅうなお辞せず」という言葉がある。底なしに酒を飲み干せることだ。私は、大相撲の或る親方に「現役時代は一晚で1斗10升）ほども飲みましたか」と尋ねたことがある。酒豪の親方は、「いやあ、さすがに1斗は」とはにかんで、5、6

升しやうかなあと破顔一笑した。ところが、江戸時代には数日で5斗も飲んだ殿様がいた。幕末大名きつての酒徒、土佐の山内容堂（豊信）である。歴史学者、家近良樹氏の最新著『酔鯨 山内容堂の軌跡』（講談社現代新書）は、容堂と土佐藩の高い政

と号しているのが、まんざら嘘でもない指摘する。私も妙に納得した気分になった。容堂は、10歳年長の久光とは気質も思考法も違っていた。久光はあまり酒が飲めないたちだ

まないが、何かで政治芝居を打つとか、わざと相手を怒らせるとか、時には酒をからめることもある。期待の参与会議はあつという間につぶれてしまった。各自の思惑が違っていたから

殿様と酒

ある。孝明天皇の強い意志は鎖港にある。家近氏の本を読むと、決裂の小道具になったのは酒だという気がしてならない。参与会議とその前後に、容堂は酒気を帯びて激烈な論をよく主張した。しかし、「所論至当なり」と参与の伊達宗城（宇和島藩）に褒められるほど、酩酊めいてい

ても理屈はしっかりしていた。とはいえ久光は納得しない。次の日、2人は長州戦争の処理をめぐって又もや対立する。今度の容堂は酒が入っても大声を出さず、酒宴のみ開いて無益という有様になった。容堂を引き立てた盟友の松平春嶽も呆れたので

ある。やや経たって中川宮邸で容堂又席のままに、慶喜と久光との間に「容堂の酔劇の再演」が繰り広げられる。慶喜は浴びるように酒を飲み、官を薩摩の言いなりと決めつけ、久光を春嶽や宗城ともども「天下の大愚物」と嘲笑した。慶喜と容堂は、酒が入ると怒りが頂点に達して相手を追い詰める言葉がすんなりと出てくる。生理的に久光や薩摩藩を嫌いなのだ。つまり2人は政治家としてもウマがあったのである。とにかく容堂が酒を抑えて久光嫌いを腹に収めるのは不可能に近い。「日日 我の酔うこと 終に涯無し」とは南宋の詩人、陸游（陸游）の作である。まるで容堂のためにある詩文ではないか。

（やまうち まさゆき）